散逸した地域遺産を再構成する

石巻市東岸の天然スレート民家・集落をめぐって

東北工業大学　ライフデザイン学部　安全安心生活デザイン学科
准教授　大沼正寛

１．散逸した地域遺産へのまなざし

（１）経年醸成価値という考え方

希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

魯迅（1921)は「故郷」[1] でこう締めくくる。この作品と最後の表現に関する解釈はさておき、現実事象として「もともと道はなく、人が歩けば道になる」は正しい。いや、正しかった、というべきか。

いま、三陸沿岸では「まず行政が道を造り、道があれば人が住む」という計画の幻想が通底しているが、住民や来訪者が何に気をかけて、どこを通ろうとするのか、小さな目標物の存在に気づかなくてはならない。もちろん、俯瞰的計画なしに予算も事業実施もあり得ないが、壊滅とされる港町や漁村にも無数の遺産があることに気づくのは遅かった。建物はおろか地中の基礎まで掘り起こし、生活痕を消し去っておきながら、たまたまその場に打上げられた船体の保存を議論していることに、どこか虚しさが募る。

それにしても、情報化が進むほど大切なものを見失うとは皮肉なものである。計画の学／術において「残されしもの―遺産の評価と活用」が、より上位に位置づけられるべきではないか。建築や都市の計画に白いキャンバスなど存在しないのに、過去を刷新するような新規性だけがもてはやされる傾向に、筆者は建築を学び始めた時から疑問を抱き続けてきた。

建築分野に限らず現代社会では、一部の文化財や骨董のみ、古いものほど価値がおかれ、他は新しいものが高価とされる。ゆえに、誰も知らない漁村の古びた小屋などはあっという間に一掃される。同じ実存事象に対して平等に評価できる価値理論はないのか。

私たちは通常モノを売買するとき、その期待値に貨幣価値を付与して交換経済の一端を担う。しかし実際には、その価値効用を耐用年数にわたって獲得するので、価格の高低を事後評価することはあっても、基本的には後の祭りなのである。ただひたすら残されしものとの共存から実際の価値を得るしかない。

こんなことは述べるまでもないし、確かに、いわゆる固定資産の減価償却が、そのプロセスを説明する一方法として認識されている。だが、ここで重要視したいのは、その価値を唯一のモノサシで等しく計る（会計上の辻褄を合わせる）ことではない。残されしものへの謝意、すなわち個々人の生活のなかでのかけがえのなさをいったいどう扱うのか、である。被災地の現在の痛みは、生活を営んできた足跡と意味を再考する余地を剥奪されたことにあるのではないか。この場所への価値観について、10 年来の持論では「経年醸成価値」なる用語をあてて説明を試みてきた[2]。

もし人間が、ある意味を込めて場所＝土地に根ざす工作物を創出し、それを広義の「建築」と呼ぶならば、本来的に建築は、時間とともに減価することはない。むしろ価値を深めていく（交換価値は減じても、経年とともに積算値が増大するのに近似して、かけがえのなさが深まる）。人がその場所に暮らすとき、その土地が高価な交換価値を持つからではなく、それとともに毎日の糧を生み、かけがえのない日々を形成するからこそ価値、意味をもつ。一所懸命たる所以である。こと東北に関しては、寒冷なる土地をこそ米どころに仕立て上げた実績に、並々ならぬそれへの思い、信仰心がある（あらゆる農山漁村の営みも同様）[3]。被災地東北に向ける国民の眼も、おそらくその愚直さへの敬意があるのだろう。

（２）建築は遺産であり、遺産は資源である

そう考えれば、建築はまさに、完成したときから固定資産であり、それが健全に使用されるほど、経年醸成価値を育む。建築はすでに遺産なのである。単なるハードウェアではなく、かけがえのない命やくらしを表象する有形無形の複合事象である。

ところが、震災によって冷静思考を見失った私たちは、計画の見定めなしに、消しゴムでそれらの痕跡を消してしまった。そしていま、亡きものを探りながら先のデッサンをなぞり（計画の修正に入り）、むしろ問題を整理しにくくしている。

そもそも、場所への経年醸成価値は永続的なものではなく、大きく二つの壁が立ちはだかる。それは災害と文明である。前者は、東北ではもちろん冷涼な気候と地震・津波が顕著であるし、西日本では台風が代表格かもしれない。後者の文明は「新しい風」である。東北ではいつも（文明の）風は西から吹いてきた。近代東北に吹いた"強風"が電源開発に代表され[4]、かような事態に至ったのは悲哀の極みである[5]。

確かに、東北―三陸地方は「循環の風土」を特質としている。神武東征（3C 後）、田村麻呂（794）、頼朝奥州合戦（1189）、秀吉奥州仕置（1590）、戊辰戦争（1868）など、300 年とも 400 年ともいえる西からの脅威は、災害周期との因果すら感じさせられる（だから東北は風を受容するだけではいけない）。そしてこうした巨視的史観を抱きつつ、現場の生活景に立ち戻ると、改めて、散逸した遺産が刻む足跡がみえてくる。

とりわけ、海浜の集落は災害のたびに変容・移動を余儀なくされてきた[6]。それでも人々は、浜との関係を断ち切らずにきた。落ちていた網を拾い、船を修復し、変わらぬ生産活動をしようと動き出す。このようなとき、崩れ掛った納屋も、露出した岩盤も、タバコ屋の前に開けた空地も、それ自体、直接有用な資源となる。それは仮の番屋になり、潮位や地盤沈下のモノサシになり、浜に拠り所を求める人々の会所になる。そして海を見守る社寺や祠が、精神的・物理的なランドマークとして、災害周期を超えて存続する。断片的な遺産が別の資源として働きながら、それ自身が記念碑としても在り続けるのである。

プリゴジンの「散逸構造理論／混沌からの秩序」は、こうした資源再構成論に示唆を与える[7]。この理論は、非平衡開放系における物質・エネルギーのたがいの作用が、混沌へと向かうだけでなく、むしろ秩序だったパターンを形成する現象が起こる事実を明らかにしたものであるが、社会学、経済学、生物学等に幅広く引用されてきた。例えば、コーヒーに入れたクリームは、お湯を注ぎスプーンでかき回すことにより、よく混ざる（カオス化）とともに、部分的に泡立ったり、だまができたりもする。そのような生まれ出る小さな秩序の核には、乳成分の固まりや気泡など、何らかの「主体」的な因子が存在しているという。

その主体的因子と小さな自己組織化の関係に、被災地の散逸遺産と、それらを核とした生産・くらしの再構築へのかすかな示唆が感じられるのである。失ったものは多いが、残されたものもある。それを地域遺産、いや資源として活かすならば、それを核として、ゆかりのある所有者、使用者、近隣者、友人らが何らかの創造行為を行うかもしれない。漁業・水産業・観光業の継承発展、農家レストラン、教育文化活動など、何でもよい。このようなとき、浜辺の古びた小屋が大切でないはずがない。地元民はもちろん、知性ある来訪者にとっては、有用さ・味わい・地域文脈のいずれにおいても真正性が感じられるに違いない。

ちなみに自己組織化の条件は「開放系」である。今回の震災もまた、投入されている人智の質量は多大である。外的支援を活かした小さな秩序が生まれ始めていることは各種媒体の通りであり、本稿でもささやかな実践内容を報じる。

場所性に立脚し、有形無形遺産群から新たな秩序＝生活システムを再構成する。少なくとも原発被災地以外の地域では、根拠地にて可能性を探ることができる。それが叶わない地域の喪失感はいかばかりか、かような視点で思考する筆者は言葉を失うが、だからこそ、遺産再構成型の計画学／術が不可欠なのである。

２．石巻市東岸の天然スレート民家・集落

（１）三大被災県における指定文化財等の分布

文化遺産の本丸は、やはり指定文化財・登録文化財であろう。今次広域震災における文化財専門家や協力者による精力的な保全活動は、目を見張るものがあった。建築分野では文化財ドクター派遣事業による状況調査、動産系の有形無形文化財については文化財レスキュー事業が、その代表格である[8]。

本稿は主に、被災地域の復興の核となる不動遺産を話題としていることから、建造物に対象を絞り、三大被災県における文化庁による指定文化財および登録文化財を内陸部と沿岸部に区分して整理した[9]。またあわせて、県・市町村指定物件を含む無数の文化財・文化財候補を概括すべく、日本建築学会歴史意匠部会による歴史的建築総目録データベースの掲載物件数を併記した（**表１**）[10]。

表１　三大被災県の国指定・登録文化財の立地内訳[9] [10]

エリア		国宝 重文	登録 有形	小計	計	日本建築学会 歴史的建築リスト 総目録DB
岩手県	内陸部	25	76	101	103	1188
	沿岸部	0	2	2		
宮城県	内陸部	11	65	76	104	2076
	沿岸部	9	19	28		
福島県	内陸部	28	136	164	176	569
	沿岸部	5	7	12		
小　計		78	305	383		3833

それによれば、いわゆる単体の文化財等建造物は３県で 4,000 件弱に上り（ただし被災解体前の物件も混在）、その１割が指定・登録され、現存していることになる。いたずらに数の比較はできないが、３県で指定・登録の実情は異なること、そもそも沿岸部の物件は少ないこと、相対的に多い内陸部の物件は、大小さまざまな地震被害を受け、復旧業務が膨大で資金・資材・人手の不足が危惧されることなどが見て取れる。

筆者はむしろ、本表に十分反映されていない伝統的建造物群保存地区（町並み保存地区）や、文化財的評価に至っていない民家、集落等を主な対象とし、保存よりは再生設計に、建築単体よりは地域計画に軸足を置いて研究・創作活動を行ってきた。そうした立場からはむしろ、幾多の災害が想起される沿岸部にも関心が寄せられるのは自然なことで、後述の現石巻市雄勝町における公共施設の基本設計[11]に参画したことを契機に天然スレート民家に関心を抱き、細々と観察を続けてきた。

（２）天然スレートと民家の基本的事項

天然スレートは、屋根や外装に葺く粘板岩の薄板で、東京駅や北海道庁など国内各地の近代建築に採用されていることから、昨今は良く知られている[12]。この岩脈は、上述・北上山系南部の旧陸前地方沿岸部に集中し、かつての産地周辺には、同じ屋根をまとった民家が広域に分布している（**写真１，２**）。

今次震災で沿岸部の相当数が失われたが、内陸部にはまだまだ現存しており、何よりその普及時期は明治・昭和の三陸津波から高度経済成長期までにあたるとみられ、津波常襲地帯の近代史と地域文脈を探るうえでの重要な手がかりになると考えられる。

この石材は、もと硯に用いたもので、近世伊達家は現石巻市雄勝町の一角を「御留山」とし、肌理が細かく加工が容易なため適材とされた。その後、石盤の適材として再発見され、明治に学童用品として定着し、大正・昭和頃に紙と鉛筆に変わるまで普及していく[13]。ところが石盤と呼応して、明治期に洋風建築を模倣したことがきっかけで、さらに屋根材として再々発見されるのである。以後、国際様式や新芸術が台頭するまで多様な建築に用いられ、牡鹿、登米、本吉、陸前高田などでも岩脈が開発された。

（３）石巻雄勝の天然スレート民家・集落

石巻市雄勝町は、かつては十五浜村と称した。実際には小漁村は 15 より多いが、明治初期の郡区町村一覧には 11 村とあり、そこに何故か欠けていた桑浜を加えると 12 村で、近世は、北の隣接 3 村を加えて十五浜といわれた。しかし結局、上記 12 村が明治 22 年(1889)に合併し、十五浜村（行政区数 20）となる。

写真 1, 2　被災前の雄勝町明神
および水浜地区の風景

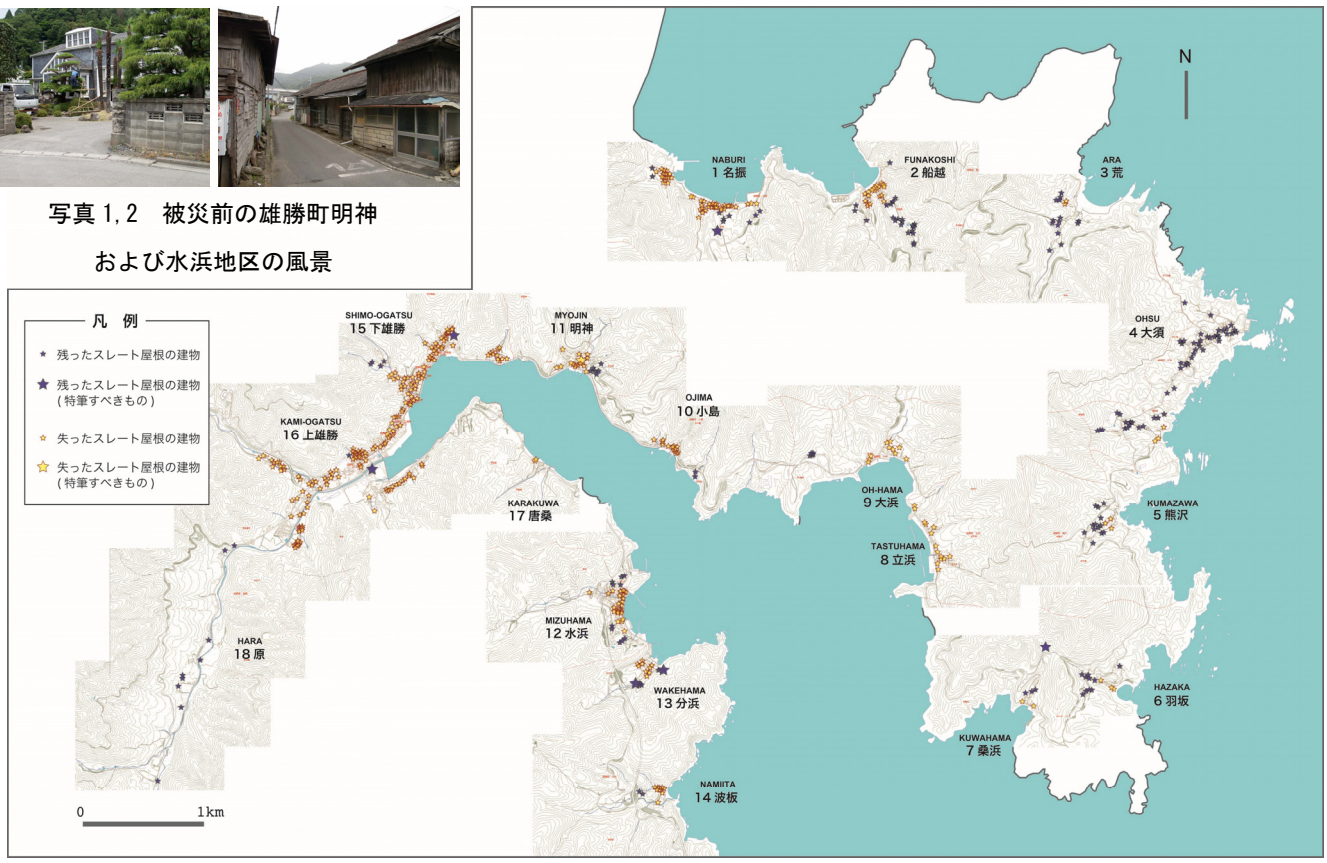

図 1　東日本大震災直後の石巻市雄勝町における天然スレート建物の残存状況（2014 年現在はさらに激減している）

この明治の合併時は、屋根用スレート材の草創期と考えられ、明治 20 年 5 月号の造家学会「建築雑誌」にはインチ法表記による価格表が載ったという。そしてその後、明治三陸津波(1896)に遭う。スレート産業が本格化するのはその後、主に明治後期からと考えられるが、昭和 8 年(1933)にはやはり三陸津波が襲う。その後昭和 16 年(1941)に、雄勝町に改称している。

戦後は、昭和 35 年(1960)のチリ地震津波があった。近代三度の大津波が、37 年＋27 年＝64 年の間に起こり、その 51 年後に今次津波が来た。そのはざまにこれら天然スレート民家は残り、あるいは新築され、約 80 年ものあいだ残存し、さらに一部は今次震災を乗り越えて残った。単体文化財のような保存は望めずとも、何らかの活用保全策を講じるべきといえよう。

ただし、その残存状況は芳しくなく、震災前におよそ 3500 棟あった建物のうち、七分の一の約 500 棟がスレート屋根であったものの、うち 7 割約 350 棟が 2011 年中に津波により倒壊または人為的に除却された（2000 年の悉皆調査を下地とした 2011-2012 の現地調査，図 1）[14]。しかも、残った 170 棟もまた、2 年 3 年と経つうちに解体されてきている。

屋根材にそれなりの愛着と誇りを有していたからこそ保全されてきた文化遺産群はいま、低地には皆無となり、内陸部の原や外洋側の大須・熊沢など、高所に土地を確保し、津波遡上高が相対的に低かった集落に残るのみとなってしまった[15]。

（4）石巻河北沿岸の天然スレート民家・集落

明治に新十五浜村を形成した旧 12 村に対し、残る釜谷・長面・尾崎の 3 漁村は、針岡、福地の 2 村とともに大川村を構成した。大川村は、明治末期から新北上川が改修開削される経過を考えると、陸路・水路両面からみて自然な一定のまとまった地理的領域ともいえるが、そこには山林や新北上川対岸との漁業における争いもあったようである[16]。

とくに長面・尾崎の２村が囲む長面浦は、複雑に隆起した山地半島が屈曲して内水面を囲むという特異な立地にあり、太平洋の荒波から守られ、浦の北の出入口は湾へとつながる一方、浦の東、南、西は粘板岩の山地であり無数の小水系が清水を注ぐ。浦は汽水域であり、魚介の宝庫で、牡蠣養殖が盛んである（**図2**）。この適地は古来、居住地、海路の要衝、信仰の場として栄え、有史以前の遺跡群、中世の板碑群、近世からの集落、近代のスレート民家が重層的に残っていた。

今次震災では、大川小の悲劇があった釜谷、長面浦西岸の長面が壊滅し、校舎と慰霊碑のみが残る場所となってしまったが、東端の尾崎は引き波による高い浸水があったものの建物の多くは残った。ところがここでも例に漏れず公費解体が進み、現在はかろうじて数件が残る状況である（**写真3, 4**）。

筆者らは、その最奥に位置するＫ家の実測調査を行い、現在はその活用保全について相談協力している[17]。

当家は棟札により明治40年（1907）の築と判明しており、全体平面は9間半×5間（47.5坪）で、西南西を正面とし、屋根は天然スレート葺きである（**写真5**）。雄勝産ではなく、雄勝に次いで一大産地となった登米市登米町の材料と思われ、当時の生産環境を窺い知る興味深い点でもある。敷地内の板倉、脇にある秋葉山の石祠も興味深く、かつては漁業・運輸業を営み、浦辺には塩煮釜もあったというから、農漁家というよりは総合商家として繁栄したものであろう（**図3**）。

これに関連して、集落の精神的支柱である地元久須師神社もスレート屋根で葺かれている。元修験の薬師堂を改修し、廃仏令により拝殿を設けたとも考えられる。さらにはスレート屋根の別の寺院・海蔵庵は、当家の菩提寺でもあり、しかも中世東北板碑の聖地としてその分野では有名である。この重層的な歴史遺産群も、解体・開発・嵩上げの危機にさらされており、遺産再構成型の地域計画を必要としている。

図２ 石巻市東岸の長面浦と長面・尾崎２村の位置

写真 3, 4 震災３ヶ月後に残る集落（左）と解体後（右）, 今泉氏撮影

写真５ 長面浦尾崎に残るスレート民家・Ｋ家

図３ 長面浦尾崎Ｋ家の配置図（2013.5 実測調査）

（５）石巻北上の天然スレート民家・集落

新北上川を挟んで河北町旧大川村の対岸（左岸）にあたる領域は、かつて本吉郡に属した石巻市北上町で、もと十三浜と称した。こちらは雄勝ほどの複雑な入り江はないものの、大河の河口流域からそのまま外洋につながる細長い領域で、隣接する浜同士の距離も長い。このため、河口周辺の氾濫原に広がった低地の町場・集落から独立性のつよい小漁村まで、多様な景観がみられ、震災後も山際にスレート民家が残る。

前節河北町と北上町は半農半漁の様相が強いが、とくに西部には、全国有数の品質を誇るヨシの産地があり、専門業者熊谷産業を筆頭に、全国の文化財建造物の茅屋根を支えてきた[18]。

スレート民家に着目して特筆されるのが、石巻市北上町相川の集団地である。この地区はその名の通り、明治および昭和の津波により高所移転を図った復興居住地である（**写真6**）。現在はかなり改修が進んできているが、往時を偲ぶことは可能であり、スレート集落としても、災害克服遺産としても貴重である。幸い地元住民やNPO，日本建築家協会らの活動が盛んであり、保全活用が期待されるところである[19]。

（６）北・西へ広がる天然スレート民家・集落

雄勝、河北、北上と、主に新北上川の河口周辺を中心に観察してきたが、こうした天然スレート民家・集落は、沿岸部や北上川流域にさらに広がっている。現在はその北限や西方の分布を確認しつつあるが、高度経済成長期まで普及した近代素材とはいえ、基本的には伝統木造建築の一端を担った歴史文化遺産に相違ない。沿岸部は激減したものの、この石屋根の超広域文化的景観はおそらく、国内に類例がない（諏訪地方の鉄平石屋根も観察したが当地方ほどの残存・広がりはないようである）。かつて昭和津波後に山口弥一郎も感嘆しているが[20]、広域・散逸・多数ゆえに文化財の観点で保護措置を講じることは容易ではない。何らかのインセンティヴを与えつつ、集落ごとの産業復興を図り、自立的な活用保全を促すようなスキームが望ましいと考えられる。

３　実践・生業再生と散逸遺産の評価

（１）雄勝石産業の再生

雄勝硯生産販売協同組合は、国の伝統工芸の指定を受けている同町の硯その他工芸製品の生産・販売とその振興を図るため設立され、先述の伝統産業会館を拠点に技能継承や販売促進に努めてきた。今次震災で、町内各地の組合員個々の工房や店舗はほぼ壊滅的となったことから、むしろ組合の結束をつよめ、共同で仮設工房を建てて復興に努めることとした（**写真 7**）。

同組合と東北工業大学は 20 年以上の協力関係を有していることもあり、平成 25 年度より雄勝石産業の復活とくらしの再生をめざす産学共同プロジェクトを開始した[21]。上記仮設工房の計画支援はもとより、未利用材の活用や漁業・水産業との連携、郷土の食やくらし、民俗調査等にも関心を広げ、同町内で支援を続けている他大学・他団体との協議連携も深めながら、現地に通い続けている（**写真 8**）[22]。そうした連携と相互理解により、硯組合の仮設工房の一角に水産加工場を設け、上述の食の開発と雄勝石の食器を組み合わせて産業復興に結びつけるなど、具体的な事業のなかで少しずつ資源の再構成が実践されつつある。

（２）長面浦の漁業再生

長面浦を中心とした宮城県漁協河北支所（組合員は長面と尾崎の漁業者約20名）に属する漁家の漁業は、主に長面浦で行う牡蠣養殖と、外洋の刺網の二種からなる。外洋側には第１種漁港の名越漁港があり、これは震災後、漁港までの陸路がほぼ絶たれた状態が続き、復旧を待っている。主力の牡蠣は、山地に囲まれているため生育速度が他地域の倍も早く、大きく美味で、実は他地域のブランド品を支給してきたが、本格復旧はようやく途についたところである。

当該漁協でも、牡蠣処理場の復旧工事がようやく着手される運びとなったが、それに付随する漁具の保管、従事者の脱衣や休息、出荷のための環境整備、何より水道復旧の見込みがないなど、不足物は枚挙に暇がない。とくに問題は、壊滅した長面浜はもちろん、残存した尾崎浜においても、諸事情から地区内の集団移転

が叶わず、災害危険区域に指定され、住まない漁業集落となってしまった。これにより、漁業者らは毎日片道20kmにおよぶ通い漁業を行うことになった。

それでも、八郎潟に代表されるように干拓と水田開発が重要とされた頃、「海洋は万物の宝庫なり」と、先人はこの浦の自然環境を守った。漁業者の浦への思いと、類いまれな資源価値は比類ないものがある。

そこで、東北芸工大の竹内氏・毎日新聞社の中島氏と筆者らは、2012年後半より当該地区漁業者らとの話し合いを重ねてきた（**写真9**）[23]。

現在は石巻市河北総合支所や宮城県漁協とも協議しながら、同地区の漁業再生に必要な広報・関連事業運営を行う一般社団法人を設立したところである。

現在、天然スレート民家との直接連携には至っていないが、地元住民のリーダーらは、震災のはるか以前から、昨今脚光を浴びている６次産業の先駆として漁業体験民宿を運営してきた知恵と自負があり、将来は遺産の連携による事業展開が可能である。2013 年 12 月には、数々の地域遺産・資源をマップ化し、エコジャパンカップで発表したところである（**図 4**）。

写真 6　石巻市北上町集団地の風景

写真 7　雄勝硯組合の仮設工房計画

写真 8 雄勝支援チーム協働催事

写真 9　長面浦の漁業を考える会

図 4　漁業者による（一社）長面浦海人の活動パネル（2013. 12. 12 発表）

４　現場の遺産を再構成する計画学術へ

以上、第１章では無用と誤解されかねない散逸した文化遺産への評価眼について持論を述べ、第２章では天然スレート民家・集落をめぐる多様な地域の現状を報じた。第３章ではそれらを核とした生産とくらしの再生にむけた実践活動について報告した。

著者自身は、ここで述べた雄勝・河北の復興支援のほか、宮城県山元町の現地再建地域の支援、仙台市内の震災をのりこえた遺産住宅群の調査、同市内の文化継承型まちづくりと世代交流をはかる共同菜園・公園の計画支援、遺産住宅の保存設計監修など、能力を超えた活動を同時進行させながら、さらに幾つかの相談案件を抱えており、安定継続が喫緊の課題である。

冒頭で述べた魯迅の話に戻れば[1)]、仙台医学専門学校（現東北大医学部）で学んだ明治後期の彼の僅かな生活痕は、未だ十分生かされていない仙台の無形遺産の一つである。2014 年正月は午年で、守り本尊とされる仙台北目町の二十三夜堂へ向かう道すがら、魯迅ゆかりの東北大学片平構内を歩き、本稿を起草した。先人の歩いた道にただ従うという意味ではなく、地域の足跡を直視し、かけがえのないものを正しく拾い集める。そこでさまよった足跡もまた、新たな道になる。

遺産は計画の母である。殊更に新規性を追い求める風潮自体、もはや現代的でない。散逸遺産の再構成を建築や都市の計画学術の初期段階に位置づけたい。それを自明のものとすれば、一見絶望的な被災地の風景のなかに、希望が見いだせるかもしれない。

謝辞

本稿は、文科省科学研究費「北上川流域における天然スレート民家の建築歴史地理」（大沼正寛・課題番号 23760607）の経過報告を兼ね、下記 21,23 をはじめとする助成を受けて行った活動に拠っている。関係各位に謝意を表したい。

参考文献・註

1) 魯迅「故郷」竹内好訳「阿 Q 正伝・狂人日記他十二篇(吶喊)」，岩波書店，1921
2) 大沼正寛「建築資産の経年醸成価値　大切な場所とその持続性」日本建築学会総合論文誌 No.10, pp63-68, 2012
3) 結城登美雄「東北農山村の底力―鳴子の米プロジェクトを中心に」2009 年度日本建築学会（東北）農村計画研究協議会資料「山村をたてなおす小さな輝き」pp5-6, 2009
4) 岩本由輝「東北開発の 120 年」刀水書房，1994
5) 青井哲人・大沼正寛・中島直人・初田香成・近藤卓編「建築雑誌 2012 年１月号特集『前夜の東北』」日本建築学会
6) 田村善次郎＋TEM 研究所「大津波・村の再生と復興」渡辺信夫編「図説日本の歴史４・図説宮城県の歴史」河出書房より pp299-306, 1988
7) I.プリゴジン・I.スタンジュール（伏見康治・伏見譲・松枝秀明訳）「混沌からの秩序」みすず書房，1987
8) 青井哲人・梅津章子・大沼正寛編「建築雑誌 2012 年４月号特集『残されしもの・生かされしもの』」日本建築学会
9) 国指定文化財等データベース，文部科学省文化庁，http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.asp (2014.01.09 参照)
10) 歴史的建築総目録データベース，日本建築学会歴史・意匠部会 歴史的建築リスト整備活用小委員会，http://glohb-aij.eng.hokudai.ac.jp/login （2014.01.09 参照）
11) 共同通信社取材班「建物と日本人 移ろいゆく物語」より「雄勝硯伝統産業会館 考え抜いた津波への備え」東京書籍，pp34-38，2012
12) 石田潤一郎「スレートと金属屋根」INAX ブックレット，1992
13) 身近な道具の近代史Ｉ，福岡市博物館，http://museum.city.fukuoka.jp/je/html/261-270/264/264_02.htm （2014.01.09 参照）
14) 大沼正寛「石巻市雄勝町地区における天然スレート民家・集落の被災状況」日本建築学会シンポジウム「東日本大震災からの教訓，これからの新しい国づくり」梗概集, 2012.3
15) 大沼正寛「納屋・漁具からみた石巻市雄勝地区の漁家・漁村構成について」2012 年度日本建築学会大会（東海）農村計画研究協議会資料, pp59-62, 2012
16) 東北大学佐藤大介氏の談による.
17) 大沼正寛「天然スレート民家が語る三陸漁村の地域文脈」2013 年度日本建築学会大会農村計画研究懇談会資料, pp11-16, 2013，神山清・田邉寛誠・今泉俊郎氏らと共同
18) 佐藤洋一郎監修，原田信男・鞍田崇編「焼畑の環境学」より大沼正寛「茅葺き民家を支えるヨシ原の火入れ」pp99-116,2011
19) 石巻市北上総合支所・北上復興応援隊・日本建築家協会宮城地域会・NPO パルシックらの協働や、熊谷産業・NPO りあすの森・工学院大学らの協働など.
20) 山口弥一郎（石井正巳・川島秀一編）「津浪と村」三弥井書店，2011
21) 東北工業大学（菊地良覺・伊藤美由紀・大沼正寛）「雄勝石産業の復活を核とした生産とくらしの再生」三井物産環境基金，2013~2015
22) 雄勝生活研究所・雄勝スターズ・東北大学雄勝スタジオ・日本大学・東京芸術大学・マナビノタネ・法政大学・Sweet Treat 311・まちコミュニケーションらとの協働.
23) 竹内昌義・中島みゆき両氏との共同による「長面浦の復興と漁業を考える会」への支援活動および河北地域実務者会議，2012~，および 後藤隆太郎ほか「東北日本沿岸地域の被災集落再生に向けた環境共生・参加型空間計画手法に関する研究」三井物産環境基金，2011-2013